

氏名	HORNEDO PEREZ-ALOE Lucia		
	(オルネド・ペレス・アロエ、ロシア)		
学位の種類	博士 (国際交流)		
学位記番号	甲第 31 号		
学位授与の日付	2021 年 3 月 19 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	近代日本文学における「変身」の隠喩— 安部公房の短編小説の分析		
論文審査委員	主査	教授	ヒガ, マルセーロ
	副査	教授	中塚 次郎
	副査	早稲田大学社会科学部教授	寺尾 隆吉

論文内容の要旨

本論は安部公房の重要な時期である戦後に集中する研究である。彼の初期と呼ばれる戦後の間に、未だ若い作家であった安部が後に書いた作品の礎を築いたときであるといえる。本研究では安部公房の作品世界を理解するため肝心である彼の短編作家の面（特に書き始めたころ）を強調したかった。その初期の短編は、スタイルや課題を探求していた、彼のキャリアの画期的な瞬間に書かれたということを論じる。安部が常に新しい表現方法を探検していたが、初期の短編では後期の作品でも見られるものが多い。その中で本研究は特別な重要性をもつと思われる変身物語に集中する。変身は初期の短編で繰り返し登場する現象であるだけでなく、その初期に行われた大事な変更を要求しているものでもあるといえる。今までの安部公房についての研究は当時の彼の変貌に関する多く論じられてきた（すでに一九七八年に本多秋五は安部のことを「変貌の作家」と呼ばれた）が、変身物語を具体的に十分に注目されていないと思われ、本研究ではとりわけ変身というテーマに着目する。本論の目標は安部公房が変身物語を書き始めた理由、そして変身物語を多く書いた理由を見つけることにある。それが理解し、当時に行われた変貌を説明できるようになっただけでなく、後期の作品を更に深く理解するためのヒントも得られた。

序では、本稿における研究の方法と、論の構造を示した。変身の意味を捕らえるには、このテーマの主な三つの特徴に注目して、変身をテーマとする作品を三つの理論を当てはめて分析した。それは文学のジャンル、アヴァンギャルド芸術とアイデンティティ問題である。本論のそれぞれの章にはそれぞれの理論的な視点に捧げ、理論の重要点を述べてから、安部公房自身がエッセイや講演で説明した自分の意見を探し、最後に作品を分析した。この三つの理論を適用して、変身という手段の意義を考え、当時の安部公房の文学における変化を指摘することができた。今までこういう理論の組み合わせで安部の作品を論じられたことなく、本研究の新しさの一つとなる。

第一章では、「新幻想文学」と「不条理文学」というジャンルの理論を考察して、本論で扱う作品をこの二つのジャンルに位置づけた。そうすることによって、ある具体的な意図を示すテキストの形式的な性質が分かることができた。今まで「新幻想文学」というフリオ・コルタサルの作品を説明するために生み出したセオリーの視点から考え、安部公房の作品は新しい読み方も可能になり、本論のもう一つの新しさとなる。

「新幻想文学」というのは二十世紀の幻想文学の進歩である。その目標は、自然法則に違反した出来事へ注意を引くというのではなく、むしろその向こうの現実が存在する可能性を告げるということである。「新幻想文学」に位置づける作品は、一見現実的な世界にありえない出来事が侵入するということを描く。このように安部公房における変身というのは、ただ単なる観察で見えない超現実を発見できるよう、現実を違う面から探検できる手段として読み取れる。安部自身は作家の役割は「現実と見えない世界、現実にあらざる世界を描い

て、それを透視してまた全然ちがった現実を見るための仮説を設定するということ」¹であると述べた。

しかし、変身をテーマとする作品は不条理文学の理論を当てはめて説明できる特徴もある。実は安部公房は、不条理演劇を代表する作家の一人であるベケットの文学を高く評価していた。それは現代の世界を、因果律そのものを不当なものとして、描いたからであると説明した²。「新幻想文学」と不条理文学は、すでに確立した価値観そのものを問うという、共通した視線を持っている。両方の目的、「新幻想文学」の場合現実のひびを表すこと、不条理文学の場合現実の理屈に合わないところに注目される、というのは共通していて、安部の作品に見えることができる。

「棒」(1955)はそのいい例である。まず物語はどここの街にでもありえあるデパートの屋上に行われる。子供と一緒にそこにいた男の人が屋上から飛び降り、棒になる。この変身は「新幻想文学」的な超現実の現象である。これに関して、安部公房は男の人が棒になることによって人間疎外を描きたかったと述べた。この非現実的なイメージを使用したのはテーマの展開に一番ふさわしく思われたからであると説明した³。そして棒を拾う先生と弟子は不条理的な要素を入れる。この三人は棒を裁く義務があつて、先生は次のように結論をまとめまる。「つまりこの男は棒だったということになる。そして、それが、この男に関しての必要にして十分な解答なのだ・・・すなわち、この棒は、棒であつた」⁴。反対なことを肯定するため、彼の結論は非論理的・不条理である。弟子を指導する先生の考え方は狂った世界を表現し、棒になった男の罰は彼らが決めるということはさらに不安に感じさせる。

第二章では、安部が積極的に参加していた芸術と政治的なアヴァンギャルドの理論を考察して、変身物語を分析した。変身を通じて、安部は自分のあらゆる芸術的な関心と政治的な心配を表現することができ、変身という手段は真正なアヴァンギャルドの手段であると論じる。まず安部公房が変身をテーマとする作品を書いたのは、戦後に展開した日本のアヴァンギャルドの二番目のブームという時代であつた。安部公房は影響力を持った芸術会のメンバーであり、当時の状況と調和する新しいアヴァンギャルドを作ろうとしていたベテランや若いアーティストたちに出会った。岡本太郎や花田清輝、そして安部と一緒に「世紀の会」を設立した関根ひろし、安部の作品をイラストした桂川ひろし、勅使河原宏と協力した。このアヴァンギャルドの二番目のブームは、マルクス主義の影響と、ヨーロッパのアヴァンギャルドの失敗したところを乗り越える目的という二つの主な特徴があつた。この二

¹ 安部公房 (2009) 「現代をどう書くか」『安部公房全集 第二十巻』(p. 344) 東京: 新潮社

² 安部公房 (1976) 「ゴドーも来ない場所」『安部公房全作品 第十五巻』(pp. 96-98) 東京: 新潮社

³ 安部公房 (1976) 「アヴァンギャルド」『安部公房全作品 第十五巻』(pp. 232-236) 東京: 新潮社

⁴ 安部公房 (1972) 「棒」『安部公房全作品 第五巻』(pp. 233) 東京: 新潮社

つの影響からインスピレーションを受け、アーティストは彼らの時代なりのリアリズムを模索していた。安部公房もそのいい例であった。彼はアヴァンギャルドをその矛盾を含めて現代を理解するための認識ならびに創作方法として理解していた⁵。そして当時は、戦後に左翼の作家がその活動を再開した時期でもあった。安部公房は本多秋五や埴谷雄高らと共に「近代文学」という雑誌に寄稿し、彼らはアーティストの芸術的な個性を捨てず社会的な問題を扱う作品を書く目的であった。

要するに安部公房は芸術的・政治的なアヴァンギャルドの精神を抱きながら、アヴァンギャルドの以前の失敗を乗り越えようとして、現代を描く方法を探していた。彼にとっては革命の芸術と社会の変革は一つになるべきであって、本論では変身を通じて安部は両方の革命を統一することができたと論じる。「バベルの塔の狸」では両方のアヴァンギャルドの要素とそれに対する批判が見える。まずアヴァンギャルドのオマージュとしてはブレトンの言及や桂川ひろしのイラストがある。一方アヴァンギャルドのパロディとしてバベルの塔の美術にあるシュールリアリズムの部屋が一番わかりにくい作品が展示されている。そしてK・あんでんが塔に入る怪しい方法は共産党への入党の形式のパロディとして読める。

第三章では、変身をアイデンティティ問題の隠喩として考察した。アイデンティティ問題は安部公房の文学で繰り返して出てくる問題である。本論で名づけた「満州の小説」すなわち『終りし道の標べに』(1948)と『けものたちは故郷をめざす』(1957)では安部が自己の構造における故郷の重要性について語っている。安部自身が満州で経験したことと実存主義の影響が明らかである。実は安部にとって実存主義はアヴァンギャルドと同じく現実を探検するための方法であると考えていた。変身をテーマとする作品以降、アイデンティティ問題について語る方法が大きく変わってきた。今度登場人物のアイデンティティを脅すものは幻想的なものであり、安部の作品はより象徴的あるいは隠喩的になったといえる。そして安部公房の初期作品におけるアイデンティティ問題を理解するには、同時の虚脱の状況に落ちていた敗戦後の日本社会および自己の構造のセオリーを考慮に入れた。その視点から見れば、安部公房の作品に登場する人物の変身はアイデンティティに関わる葛藤がもたらす結果として読み取れた。

「デンドロカカリヤ」では上記のアイデンティティ問題に関わる葛藤が現れ、以前・以降の作品にも出てくる特徴が見られる。まずハイデッガーやリルケの言及があって、実存主義の影響が明らかである。コモン君は顔が裏返し、自己の内面と外面が交換してしまうという、変身も実存主義的な概念を使用して描写されている。戦後日本の社会が悩んでいた内地と外地の対抗という問題への言及もある。そしてコモン君は自己を支える大きな柱である自分の名前をあきらめながら、H公園で植物になるという事実は、自分と関係ない社会の新しいアイデンティティに従うという意義を持っているといえる。

⁵ 安部公房 (2009) 「ピカソのリアリティ」『安部公房全集 第三巻』(pp. 172-175) 東京: 新潮社

最後に、緊密に結ばれているこの三つの角度から安部公房の変身物語を分析してから、彼の初期に行われた変貌を更に深く理解できた。「新幻想文学」、「不条理文学」と「芸術のヴァンギャルド」も現実を今までと違う角度から考察したいという目的が共通している。安部もそういう意図を持ち、この三つの方法を使用して、普通の目で見られない現実も探検しようとした。

安部公房にとっては芸術というのは幅広い領域であり、芸術的に自分を表したい気持ちさえあれば、様々なアプローチがあり得る。しかし芸術は革命的でもあるべきだと思っていた。それはリアリズムの手段を広げたいという意味だけでなく、社会的な問題を扱う必要があるという、政治的な意味もあった。安部公房にとっては人間に悩ませる問題が社会的な面はもちろん、個人的な面も重要であり、彼自身が述べたように「社会的実存文学の方法」を確立するつもりがあった⁶。このあらゆる意図や概念は初めて変身をテーマとする物語で見ることができる。本論で分析した作品は以降にまた展開した安部公房の文学の基本的な特徴が指摘できる、彼のキャリアの画期的な作品であるといえる。

きる。

⁶ 本多秋五 (1978) 「変貌の作家安部公房」 『作家の世界 安部公房』 (pp. 55-70) 東京: 番町書房

審査結果の要旨

本研究は、スペイン語圏でも評価の高い安部公房の初期短編小説から、変身をテーマとした九編（「デンドロカカリヤ」、「夢の逃亡」、「赤い繭」、「魔法のチョーク」、「洪水」、「S・カルマ氏の犯罪」、「バベルの塔の狸」、「詩人の生涯」、「棒」）に注目し、第一章では「新幻想文学」及び「不条理文学」の見地から、第二章では芸術的・政治的アヴァンギャルドの影響という観点から、そして第三章では「実存主義哲学」との関連という論点から、そのテキストを詳細に分析することで、難解とされる安部文学に新たなアプローチを試みている。

直接の対象とした短編小説は、いずれも 1949 年から 1955 年の間に発表されているが、本稿によればこれは、哲学的思索に満ちた作風の第一期に続いて、「仮説の文学」を実践した安部文学の第二期と重なっており、名作『砂の女』に始まる絶頂期への橋渡し役を果たしている。

第一章では、二十世紀の世界文学で重要な役割を果たした「新幻想文学」と「不条理文学」に関し、前者についてはハイメ・アラスラキやダビド・ロサス、後者についてはマーティン・エスリンやウジェーヌ・イヨネスコといった批評家・作家の提唱に基づいて理論的に定義したうえで、両ジャンルの様々な特徴を対象作品内に見出している。変身のモチーフを中心に、世界の無意味と狂気を暴く不条理文学と、非日常的視点に律された夢的世界を構築する新幻想文学を組み合わせることで、現実世界を観察するための新たな視座を提供するという安部の試みが、具体的な作品分析を通して明らかにされている。

第二章では、シュルレアリスムを中心とするアヴァンギャルド芸術及び共産党を中心とする政治的アヴァンギャルドと安部の関係について、具体的な創作活動や作家・芸術家との付き合い、様々な雑誌や前衛的知識人グループへの参画、共産党への加盟といった過程を丁寧に追ったうえで、作品分析では、対象とする短編小説にその様々な痕跡を見出している。ダリやマリネッティやブルトンといった前衛的芸術家・作家への言及、文学に絵画を取り込む試み、搾取された労働者階級と裕福層を対置する構造などにアヴァンギャルドの影響を見出しながらも、本章の結末近くでは、愚弄や風刺、パロディの手法により、安部が巧みにアヴァンギャルドの硬直的性格と距離をとっていたことが具体的に示されており、その際に変身のモチーフが重要な役割を果たしていたことも提起されている。

第三章では、キルケゴールやハイデガーに言及しながら実存主義の流れを概略し、日本と満州における戦中戦後の厳しい生活のなかで安部がどのようにその哲学を吸収したか、伝記的事実を辿りながら明らかにしたうえで、現代世界に生きる人間のアイデンティティ、とりわけその確立と揺らぎというテーマに注目して、対象作品に通底する安部のヴィジョンを解き明かしていく。この章の作品分析では、人間が無機物に姿を変えるという物語の展開が、アイデンティティをめぐる安部の探究と密接に結びついていることが論証されている。

全体として、理論的考察を踏まえて具体的に作品のテキスト分析に入るといった論法がし

っかり機能しており、各章ごとに後半でそれぞれのテーマに沿った作品分析を行ったことで、明解な議論が展開されている。独自の分析を通して安部文学の本質に迫ることができた部分も多く、「世界に自分の居場所を見つけられない者たち、自分が誰かを見失った者たちが、避けがたく変身に逃げ道を求める」(p.214)という指摘は、今後の研究にも重要な論点となると思われる。

様々な日本語文献とともに、スペイン語、英語、フランス語で書かれた研究も参照して書かれていることは、本論文の大きな強みであると言える。さらに、全三十巻の『安部公房全集』に依拠したうえで、対象となる九編の短編小説に関しては、初出版、改訂版、文庫本収録版など、様々な版を参照して、そこに見られる細かな差異まで作品分析に活かしている点も高く評価できる。また、スペイン語で執筆されているため、長い幻想文学の伝統を持つスペイン語圏の文学研究者にとっては、異文化の幻想文学を参照するにあたって、貴重な研究となることは間違いない。

本論文の弱点は、各章の理論的考察において、いわゆる「孫引き」、すなわち、提唱者自身ではなく当該分野の研究者の論考から引用している部分が散見する点だろう。安部の創作と密接に関係するシュルレアリスムや実存主義については、もう少し念入りにブルトンやハイデガーなどの原著を参照していれば、さらに作品分析が深められたのではないかという印象は拭えない。とりわけ、『砂の女』や『密会』といった名作にも通じる安部独自の小説作法については、十分に論じつくされたとは言えず、今後の課題として残ることになった。

とはいえ、十分に先行研究を踏まえたうえで、対象作品を日本語で綿密に分析し、そこから得られた考察を正確な学術的スペイン語で表現できた点で、本論文の功績は大きく、博士論文の要件を十分に満たしていると判断できる。